

國學院大學學術情報リポジトリ

源氏物語儀礼表現論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-22 キーワード (Ja): 『源氏物語』, 人生儀礼, 葬送, 裳着, 算賀 キーワード (En): 作成者: 武田, 結詩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001655

論 文 要 旨

学籍番号	233205	氏 名	武田 結詩
論文題目： 源氏物語儀礼表現論			
(内容の要旨)			
<p>本論文では、『源氏物語』の儀礼表現に焦点を当て、物語展開における儀礼の意義について研究する。そもそも儀礼とは、宮中儀礼などの公的儀礼と、人生儀礼などの私的儀礼に大別できるが、本論文では後者を対象とする。平安時代は先例主義であり、人生儀礼も基本的には先例に倣って実施されていた。そのため、『源氏物語』においても、先例に倣った人生儀礼が催されていると言えよう。しかしながら、人生儀礼の中には、政治状況などを踏まえた個人意識によって形成されている部分も見られる。『源氏物語』における儀礼の表現を丁寧に分析していくことを通して、各儀礼の背後にある個人意識を明らかにし、儀礼が『源氏物語』をいかに形成しているかを本論の主たる対象とした。</p> <p>第一章では、「夕顔」巻の夕顔の葬送を対象として、惟光が「上席」に夕顔の遺骸を包むふるまいと、そこからこぼれ出る夕顔の動的な髪表現に着目した。光源氏と惟光のふるまいが、往生し得ぬ夕顔を生み出しており、夕顔物語に囚われる光源氏の姿を表出させていることを論じた。</p> <p>第二章では、「行幸」巻の玉鬘の裳着を対象として、光源氏が主催を務めることと「ことごとしき御遊びなどはなし」の関係に着目した。玉鬘に対する光源氏の思慕から形成された裳着が、玉鬘の尚侍出仕の告知を妨げ、内大臣や冷泉朝の権威を削ぎ落とし、光源氏の栄華の陰りを見せる場として機能していることを論じた。</p> <p>第三章では、「若菜上」巻の光源氏の算賀を対象として、玉鬘主催の算賀が若菜献上に合わせて実施されることと、賀宴の場に玉鬘腹の二子を連れ立つ鬘黒のふるまいに着目した。若菜の献上と子息対面は、式部卿官家との離縁や「若菜上」巻をめぐる政治状況を踏まえたうえで、鬘黒一族を光源氏の後継者として宣言するふるまいであり、政界における立場確立への布石となっていることを論じた。</p> <p>以上の考察を通して、『源氏物語』における人生儀礼は単なる儀礼の描写に留まらず、儀礼に関わる人々の現況と思惑を浮き彫りにし、物語展開を形成する方法として用いられていることを明らかにする。</p>			
キーワード (5 語)			
『源氏物語』 人生儀礼 葬送 裳着 算賀			